



TITLE:

カール・コルシュの実践の弁証法 -  
カール・コルシュのマルクス主義  
(1) -

AUTHOR(S):

平井, 俊彦

---

CITATION:

平井, 俊彦. カール・コルシュの実践の弁証法 - カール・コルシュのマルクス主義(1) -. 経済論叢 1966, 98(1): 1-14

ISSUE DATE:

1966-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/133145>

RIGHT:

# 經濟論叢

第九十八卷 第一號

---

カール・コルシュの實踐の弁証法 …………… 平 井 俊 彦 1

金輸出禁止繼續の論理 (1917—1919) (1) …… 小 野 一 一 郎 15

ドイツ革命と社会化論争 …………… 阪 上 孝 30

ポーランド社会主義運動とその思想 …………… 竹 本 信 弘 47

---

昭和四十一年七月

京都大學經濟學會

# カール・コルシュの実践の弁証法

——カール・コルシュのマルクス主義 (1) ——

平 井 俊 彦

## I 初期のカール・コルシュ

「弁証法的思惟は、社会生活の全体的性格に重きをおく。そして、社会生活の物質的側面と精神的側面とは切り離すことができない、と主張する。けれども、マルクス主義思想の歴史をたどってみると、観念論的、機械論的、正統派的という諸潮流の間の論争が、いつもある。意識的にせよ、無意識的にせよ、マルクス主義から離れていく立場（ペルンシュタイン、ド・マンなど）は問題外としても、いわゆる正統派の内部でさえ、人間の行動、人間の世界改造の可能性に重点をおく潮流と、反対に、社会的惰性、環境の抵抗、物質的な力に重点をおく潮流との間に、たえざる動揺があったことは事実である。このような動揺は、偶然によるものではなく、それ自身、社会的変動を、労働運動の行動条件の変化をあらわしているものである。」<sup>1)</sup> この文章は、ゴールドマンが『人間の科学と哲学』（1952年）のなかでマルクス主義の潮流を特色づけた一節であるが、これら2つの潮流はそのあらわれ方のちがいはあれ、歴史的危機の段階において、きわめてはっきりと対立する。ことに「人間の力を、人間の行動によって社会および世界を変革する可能性を強調するマルクス主義の優れた著作は」<sup>2)</sup> すべて、この危機の段階にあらわれている。1848年革命、1871年のパリ・コミューンの時代、第1次ロシア革命、1918年ドイツ革命の時代が、そうである。18年のドイツ革命の段階で、ゴールドマンはローザ・ルクセンブルグの『ユニウス・ブロシュール』（1916年）とルカーチの『歴史と階級意識』

1), 2) Lucien Goldmann, *Sciences humaines et philosophie*, 1952. 清水幾太郎・川俣晃自訳『人間の科学と哲学』岩波新書、85-6 ページ。

*Geschichte und Klassenbewusstsein* (1923年) をあげているが、われわれはこれらにカール・コルシュの『マルクス主義と哲学』 *Marxismus und Philosophie* (1923年) を、ぜひ付けくわえねばなるまい。

ドイツ革命からソイマール共和国成立時代にかけてのドイツ独立社会民主党の急進左派の理論家カール・コルシュ Karl Korsch (1886—1961) の名は、これまで一般に、いや内外のマルクス主義者の間ですら、あまり知られていなかった。それというのも、いわゆる正統派マルクス主義の支配している間には、こうした左翼急進主義者は非情な歴史のならわしとして、おうおう間に葬られてしまいがちだからである。コルシュが見直されてきたのは、戦後ではハンガリー事件以後のことであろう。1957年に『マルクス主義研究』第2巻で、フェッチャー Fetscher がルカーチとならべて、コルシュの『マルクス主義と哲学』を「マルクス・ルネッサンスの第2番目の重要著作」<sup>3)</sup> と呼んだし、1963年に『カール・マルクス』 *Karl Marx* (1938年) が再版されて<sup>4)</sup>、しだいに注目されるようになった。最近になって、マティク P. Mattick が「カール・コルシュのマルクス主義」を『サーヴェイ』誌上で論じ<sup>5)</sup>、わが国でも野村修氏が「プレヒトとマルクス主義との出会い—プレヒトとカール・コルシュ—」を論じて<sup>6)</sup>、かなり本格的なコルシュ研究がおこなわれるようになった。わたしはこの小論

3) Irving Fetscher, „Von der Philosophie des Proletariats zur proletarischen Weltanschauung“, *Marxismusstudien*, Zweite Folge, 1957, S. 31. フェッチャーはこの論文のなかで、ヘーゲルとマルクスとの結びつきの再評価、したがって若きマルクスの重視と、意識的に行動するプロレタリアートの立場を強調し、これをルカーチとコルシュの功績としてつぎのように評価する。「1920年代の初期に、マルクスの思考命題を改訂する一連の思想家があらわれた。ゲオルク・ルカーチの独創的な著書『歴史と階級意識』はことに、——マルクスのきわめて有益な青年時代の論文『経済学と哲学に関する草稿』を知ることができなかったにもかかわらず——マルクスの展開した考え方とおどろくほどよく似ている。もとより、ルカーチがブルジョワ的ヘーゲル・ルネッサンスから出発したために、また、こうした両者の思考方法が類似しているのである。『マルクス・ルネッサンス』 *Marx Renaissance* の第2の重要著作たるカール・コルシュの『マルクス主義と哲学』に反対した点で、カウツキーとレーニンの考え方がよく似ていることがわかる。」

4) Karl Korsch, *Karl Marx*, New York, 1963. 本書は1938年版の再版であるが、ドイツ語の原典からの英訳である。このドイツ語の原典は未出版で草稿のまま残っており、英訳とは少し異なっているといわれる。

5) Paul Mattick, „The Marxism of Karl Korsch“, *Survey—A Journal of Soviet and East European Studies*, Oct. 1964, pp. 86-97.

6) この論文は『新日本文学』第221号、1965年12月号の特集「プレヒトとマルクス主義」の1論文として、収録されている。

のなかで、「ルカーチズム」Lukácsism と称せられるこのカール・コルシュのマルクス主義——左翼急進主義思想の特色を明らかにしてみよう。まず、本論に入るまえに、まだあまりわが国に知られていないコルシュの生涯をその前半(1926年まで)について、マティクの前掲論文によってごく簡単にスケッチしておこう。

コルシュは1886年にドイツの中流家庭に生まれたが、その生地はさだかでない。恵まれた青年時代を送ったようで、イェナ、ミュンヘン、ベルリン、ジュネーブなど各地で哲学、法律学、経済学および社会学を学び、1911年にイェナ大学に学位論文『民事訴訟における立証責任法規の適用と自白の適性』を提出して<sup>7)</sup>、法律学のドクターを得た。すでに学生時代から、コルシュはきわめて強い実践的な関心をしめしており、伝統的な学生団体に反対して「自由主義的學生運動」に加わり、アカデミーと社会運動を結びつけようと努力したといわれている。学位を得たあと14年まで、かれはイギリス法と国際法の研究のためにイギリスに留学したが、その間にフェビアン協会に加入した。他方、思想的には、20世紀の初頭ヨーロッパの思想界を支配していたカント哲学の影響を受けたが、やがてヘーゲル、フォイエルバッハ、マルクスに関心を向けはじめた。コルシュがこの時代に、具体的に何を読んでいたか、またどの書物からもっとも大きい思想上の影響を受けたかは明らかでないけれども、こうした主観的観念論にあきたらず客観的観念論や唯物論へと関心を移していった過程は、当時のルカーチ(コルシュの1年先輩)の歩みにも似ており、おそらく当時の左翼インテリゲンチヤの思想形成上の1つの類型をしめしているとも考えられよう。それとともに、コルシュはこれら一連の哲学研究を通じて、研究の中心を技術的な法律学から、しだいにその物質的基礎たる経済学と政治学へと移していったのである。だが、この時期のコルシュはまだ、はっきりとマルクス主義の立場に立っておらず、かれの関心は理論でなく、どこまでも実践活動にあって、労働運動内部のフェビアン主義、サンジカリズム、ギルド社会主義の立場をと

7) Karl Korsch, *Die Anwendung der Beweislastregeln in Zivilprozess und das qualifizierte Geständnis*, Bonn, 1911.

っていた。だが、同時に、かれはフェビアン協会の政治的・行政的な改良主義やサンジカリズムの経済的計画案にもあきたらず、実践活動によって社会主義理論を現実のなかへ実現しようとしたのであった。そして、この実践を重視する立場が、20年代のコルシュのマルクス主義を一貫しており、また、かれのマルクス主義を個性的なものとしているのである。

1914年にドイツに帰国したコルシュは、軍人として第1次世界大戦に参加したが、15年と16年にツィマバルトとキーエンタールで反戦運動が生ずるや、これを熱狂的に支持した。大戦後19年に復員してのち、独立社会民主党に入党した。かれが本格的に文筆活動を始めたのもこの時期であって、イエナ大学に帰任して、民法ことに労働法と団体交渉、およびその他の社会科学、現代史と哲学を講義するかたわら、社会主義の現実問題に関心をもち、これに関する論文を公刊した。19年の『社会化と労働運動』<sup>8)</sup> および『社会化とは何か』<sup>9)</sup> が、これである。当時、18年革命をめぐる大きな問題であった社会化問題にふれて、コルシュはつぎのようにのべている。「労働者層の利害を代表すべき国有化には、なによりもまず、生産および社会生産過程の組織化、管理、決定に労働者の参加を実現すべきである」と。このようにして、コルシュは産業における労働者の自主性と政治制度による中央集権的計画を結びつけ、サンジカリズムと社会主義思想との結合をはかったのであった。

1920年代に入るや、コルシュが関心をもっていた社会化が挫折し、独立社会民主党も分裂して、かれは左派の同志とともに共産党に合流した<sup>10)</sup>。18年ドイツ革命をめぐる「ドイツ労働者階級のなかで指導理念を分裂させた大きな問題

8) K. Korsch, "Sozialisierung und Arbeiterbewegung", *Freies Deutschland*, Hannover, 1919.

9) K. Korsch, "Was ist Sozialisierung?" *Sozialistische Schriftenreihe*, Heft 1, Hannover, 1919.

10) Paul Mattick, *The Marxism of Karl Korsch*, pp. 88-9. マティックはコルシュがドイツ共産党へ加入したさいの留保をあげて、1924年以後にコルシュがコミンテルンに対立する契機がここに出ていることを暗示している。コルシュがKPDへ合同するばあい、「各国の共産党をモスクワ中央の綱領と戦術に従属させ、ロシア共産党に統制される共産主義インターナショナルへの加入の条件に喜ばなかった。」独立社会民主党の分裂およびコミンテルン第2回世界大会(1920年7月)におけるコミンテルン加入のための21ヶ条の条件について、林健太郎『ワイマール共和国』82ページ以下を参照。

は、国民議会か評議会政府かであった。<sup>11)</sup> ドイツ社会主義者のなかの急進左翼は、労働者階級的手中に経済上および政治上のすべての権力を獲得するために、つねに労働者評議会の体制を基軸とした社会建設を求めている。「高度な民主主義の、人民大衆の絶対的に自由な自治の機関たる」<sup>12)</sup> この評議会中心の革命思想が、それである。この考え方は20年代中ばにもおよび、ルクセンブルギストの共通の姿勢であったが、コルシュもまた一貫してこの立場に立っていたのである。これに対して、ドイツ社会民主党の主流派はこの方策をとらず、社会化にもぎわめて消極的であった。ことに、正統派カウツキーまでも俗流マルクス主義におちいったのを見て、かれらがすでに単なる1つの知識体系におちいり、もはや社会主義の目的を革命的に実現しようとする実践的意欲をもちえないと判断した。そうだとすれば、18年革命が提起したプロレタリア革命の歴史的課題を遂行しうるのであろうか。コルシュの危機意識に映じた問題性は、これであった。こうして、カウツキーをふくめてドイツ社会民主党に対決して、硬化するマルクス主義に再び革命的実践という生命の息吹をあたえようとしたのである。1922年には、『唯物史観の立場』*Der Standpunkt der materialistischen Geschichtsauffassung*, ついで23年に主著『マルクス主義と哲学』を執筆した<sup>13)</sup>。かれの革命的マルクス主義は急速に共産党の指導理論となり、24年には党の理論的機関誌『インターナショナル』*International* の編集者となった。それとともに、23年にはチューリングゲン議会の代議士となり、翌24年には帝国議会に入ったのである。

だが、23年から24年にかけて、ドイツ共産党そのものも1つの危機に当面していた。23年には、フランス軍のルール占領、激しい戦後インフレーション、

11) Arthur Rosenberg, *Geschichte der Weimarer Republik*, Frankfurt am Main, 1961, S. 16. 吉田輝雄訳『ヴァイマル共和国史』23ページ。

12) A. Rosenberg, *ibid.*, S. 17. 邦訳, 25ページ。

13) コルシュは普通、初期の論文ではこの『マルクス主義と哲学』で知られているが、この1年前の22年に、*Arbeitsrecht für Betriebsräte*, Berlin, 『経営評議会のための労働法』を書いてゐることはあまり知られていない。本書はプロレタリアートの階級闘争の視点から法の問題を論じたものであるが、コルシュの労働観を示す貴重なものである。小論はこの点にまで論ずることはできないけれども、いずれ機会をみてふれてみたい。

大規模なストライキの連続、ハンブルグ一揆の失敗、ナチ運動の出現という危機に見まわれた。これに対して、コミンテルンもドイツ共産党もなんら有効な判断を下すことはできなかった。あまつさえ24年1月のレーニンの死を転機として、ドイツ共産党は方向を屈折させはじめた。「1924年以来、共産主義諸党派の内部ではしだいにスターリニズムへの傾斜がおこなわれ、それにともなうて諸党派はしだいにボルシェヴィキ化にむかい、ついでモスクワ中央へ完全に従属するにいたった。それとともに、第3インターの機能も変化して、これまでの世界プロレタリア革命的手段ではなくなり、いよいよソヴィエト・ロシアの外交政策の手段となっていったのである。」<sup>14)</sup> こうした情勢の変化は、『マルクス主義と哲学』の評価を変え、またコルシユの党内における地位に変化をあたえたのである。

正統派カウツキーのダーヴィニズム的進化論を攻撃した本書は、ただちにカウツキーから反批判をうけ(1924年6月の『ゲゼルシャフト』誌に所収)、さらに、ドイツ社会民主党大会で議長のエルク Wels が「開会の辞」で、本書を批判した(同年同月の『フォアヴェルツ』誌)。のみならず、コミンテルン内部で、「共産主義インターナショナル」第5回大会で、議長ジノヴィエフ Sinowjew から同じく「開会の辞」で批判をうけたのである。その後、あいついでコミンテルン内部から出された批判について、コルシユはかれらへの反論「マルクス主義と哲学の問題の現状」のなかで、そのあらましをのべている<sup>15)</sup>。いま、わ

14) Siegfried Bahne, „Zwischen „Luxemburgismus“ und „Stalinismus“—Die „ultra-linken“ Opposition in der KPD“, *Vierteljahrschrift für Zeitgeschichte*, 1961, Jg. 9, S. 360.

15) コルシユによれば、『マルクス主義と哲学』に対する批判は、まずブルジョワ哲学の側からおこなわれたのであって、本書が「理論的にも実践的にも真に革命的な全成果の展開と基礎づけに努めたにもかかわらず、ブルジョワ哲学はこれを具体的に表現し批判したりせず、ブルジョワ的立場としていわゆる「都合のよい側面」を一面的に取りあげ、都合の悪い側面を退げ、前者の成果を科学的進歩だと評価した。」(引用文中の一部を省略。)

これに対して「今日の公認『マルクス主義』の2つの潮流はただちに本書のなかに、古くさいマルクス正統派教会の2つの告白への異教的反抗ぶりを本能的に嗅ぎつけて、召集された公会の席上で、本書の思想を公認学説からの逸脱であるとの判決を下したのである。」Korsch, *Marxismus und Philosophie*, 1930, SS. 1-2. コルシユはこのあと、ジノヴィエフについてかれを批判した人として、バムメル Bammel とルポル Luppel, ブハーリン Bukharin とデボーリン Deborin, ベラ・クン Bela Kun とルダス Rudas, タールハイマ Thalheimer とドンカー Dunker などを挙げている。



れわれはこの間の論争に深く立ちいるわけにはいかない<sup>16)</sup>。われわれはただ、コミンテルンがボルシェヴィキ化への傾向が進められたときに、コルシュの理論的立場が一方でカウツキー主義に対立するとともに、他方ではレーニンをもふくめて第3インターのマルクス主義に対立するにいたったために、かえってその弁証法的性格がいよいよ鮮やかに浮かび上がってきたということ、逆にいえば、コミンテルンのマルクス主義がしだいに自然科学的唯物論への傾斜をしめすにいたったことを、あきらかにすれば足りるであろう。

『マルクス主義と哲学』の運命は、同時にその後のコルシュの政治的立場を象徴している。コミンテルンのボルシェヴィキ化およびそれにとまなうドイツ共産党内部でのボルシェヴィキ派たるマスロフ・フッシャー・中央派 Maslow-Fischer Zentrale (1924年4月から1925年10月まで)の形成に対抗して、コルシュは極左派 Ultra-Linke の代表者として、26年3月末からベルリンで反対派の機関誌『共産主義政治』*Kommunistische Politik*の編集者となった<sup>17)</sup>。同じ反対派の一派であったカッツ Katz グループ(第2スパルタクス団)が主として南ザクセン支持層をもっていたのに対して、コルシュ・シュヴァルツ Korsch-Schwarz グループ(「徹底派左翼」Entschiedene Linke と呼ばれていた)はルール地方、ニーダーライン、ハレ＝メルゼブルク、ファルツ、ヘッセン＝フランクフルト、およびベルリンに根をはっていた。コルシュにとって、ボルシェヴィズムがソヴィエト・ロシアの維持のためにプロレタリア世界革命を犠牲にする第3インターは、第2インターのナショナリズムの再版にほかならない。どこまでも、革命的労働者評議会の独裁によるドイツ革命を主張するコルシュは、第3インターに反対し続け、独ソ協定に反対したかどで、26年5月3日に

16) コルシュの批判者たちへの反論の内容については、野村修氏の前提論文のなかの、要を得た紹介を参照されたい。

17) Siegfried Bahne, *ibid.*, SS. 370-71. パーネのこの論文は、1924年以後のコミンテルンの変質にとまなうドイツ共産党の変化を詳細に取りあげている。シノヴィエフから「野生化した小ブルジョワ」と呼ばれたこのコルシュ・グループには、シュヴァルツの他に『共産主義政治』の出版人であった建築労働者ハインリッヒ・シュラーゲヴェルト Heinrich Schlagewerth がいた。このグループも、その他の左翼反対派グループとおなじく、1928年のコミンテルンの左傾化とともに解体したのである。

党から除名されたのである<sup>18)</sup>。

## Ⅱ 実践の弁証法

革命の詩人ハイネは『ドイツの宗教と哲学の歴史』(1834年)のなかで、ドイツの古典哲学の偉業をフランス革命のそれになぞらえている。というよりはむしろ、ハイネにとって、思想こそが現実に魂をあたえ、行動を支える母胎であり、この意味では、ロベスピエールはルソーの助手にすぎない。「思想は行動になろうとし、言葉は肉体になろうとする。」<sup>19)</sup> 現実を貫く思想のこの歴史的課題をあざやかにしめしてくれた人に、ドイツ古典哲学者ヘーゲルがあった。コルシュはこの古典哲学の伝統的立場に立ち、意識が現実を貫ぬく弁証法こそが、ヘーゲルからマルクスが受けついだ偉大な遺産であり、マルクス主義の精随であると考え<sup>20)</sup>。客観的存在と主体的意識が結びつくとき、はじめて革命的実践の理論が可能である。コルシュが『マルクス主義と哲学』で提起した問題は、まさにこれであった。「ヘーゲルが『哲学史やその他の著作で、かれの

18) Paul Mattick, "The Marxism of Korsch", p. 89. なお、コルシュが除名された直接の原因と事情について、野村氏は前掲論文でつぎのようにいう。「1926年4月、シュトレゼマンとクレスティンスキーとによって調印された独ソ協定に、かれが反対したからだと思われる。というのは、かれが除名されたのは5月であり、つづく6月の国会において、かれは右の協定の批准に反対しているからだ。この協定には右翼政党から共産党にいたる全政党が一致して賛成している。反対したのはコルシュをふくむ3名だけで、かれらはコルシュのイニシアティブのもとに、この協定は労働者階級のインタレストに反すると判断したのである。ボルシェヴィズムとドイツ・ミタリズムとが連繋する危険を警告したローザ・ルクセンブルクの第11スバルタクス書簡(1918年10月)を引用した、6月10日のコルシュの国会演説は、共産主義者が公然とソ連の外交政策を攻撃した点で、空前のものといわれている。」前掲論文、77ページ。

19) Heinrich Heine, *Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland*, 1834, 伊東勉訳『ドイツ古典哲学の本質』岩波文庫版、138-39ページ。ハイネは「思想が行動の基礎である」として、つぎのようにいう。「われわれの考え出した思想は、ひとつの魂である。思想はからだをあたえられるまでは、つまり物質的な現象にしてみらうまでは、われわれにせがんでやめない。思想は行動になろうとし、言葉は肉体になろうとする。」

20) Karl Korsch, *Marxismus und Philosophie*, 1. Auflage, 1930, SS. 54-5. コルシュはブルジョア哲学および正統マルクス主義者の弁証法の無視に対決して、つぎのようにのべている。「19世紀後半のブルジョア学者たちは、このヘーゲル哲学をすっかり忘れて、哲学と現実、理論と実践との関係を『弁証法的』に考察しなくなりました。他方でまた、19世紀後半のマルクス主義者たちの側でも、40年代に青年ヘーゲル主義者であったマルクスとエンゲルスがヘーゲルと決別するさいに、はっきりと意識して『ドイツ観念論哲学』から、歴史と社会の発展過程の『唯物論的』解釈のなかへ弁証法の原理を取り入れているのに、この原理の本来の意味をしだした忘れていったのである。」

直接の先駆者であるカント、フィヒテ、シェリングの哲学の本質を論じた言葉がそのままあてはまるのであって、革命が現実の歴史的運命を貫ぬいていたこの時代全体の哲学諸体系のうちには、『革命が思想の形で定着し、表現されている』のである。ブルジョワ革命の時代に生み出したこの偉大な思想家（ヘーゲル）は、『思想の形をとった革命』をば、現実的革命的・社会的過程全体を構成する現実的要素だと考えていたのである。<sup>21)</sup> いや、むしろヘーゲルがあざやかにしめしているように、「自由はフランスでは抽象的で未展開のままで現実に向かう」のに対し、「ドイツでは、自由の原理は自覚した意識の関心事となり、まさに理論的に形成されたのである。」<sup>22)</sup>

ところで、このようにコルシュが歴史的現実のなかで思想（哲学）の能動的役割を強調する背景には、すでにのべたように、プロレタリアートを変革の主体として18年ドイツ革命で提起された社会主義の実現という歴史的課題がある<sup>23)</sup>。だが、革命後のワイマール共和国の成立過程であきらかになったのは、社会民主党のブルジョワ化でしかなかった。あまつさえ、かれらは社会主義者の共通の政策であった社会化すら挫折させてしまった。ドイツにおいてプロレタリア革命を実現するためには、どうしてもこれらの変質化した第2インターのマルクス主義と対決して、マルクス主義を社会変革の理論に引きもどさなければならない<sup>24)</sup>。コルシュにとって、こうした社会民主党の思想的体質は、す

21) Karl Korsch, *ibid.*, SS. 60-1.

22) Karl Korsch, *ibid.*, S. 62. この文章は、ヘーゲルの『歴史哲学』からコルシュがとってきたものであって、ルソーとカントにおける自由の意味が異っていることを、ヘーゲルはのべている。

23) ここに、ルカーチとコルシュの共通の危機意識があった。わたしは以前に、『思想』（第489号、1965年3月）所収の「東欧における歴史意識」のなかで、ルカーチについてこの点を示しておいた。

24) ある意味で、コルシュの『マルクス主義と哲学』が、第2インターのイデオロギーの批判史である。ところで、この時代のマルクス主義内部での「新カント主義」と「新ヘーゲル主義」との対決については、Victor Zitta, *Georg Lukács' Marxism, Alienation, Dialectics, Revolution, — A Study in Utopia and Ideology*, Hagne, 1964 の Chapter VI. Hegel-Marx-Lukács を参照せよ。ツィタによれば、新カント派のマルクス主義の系譜に E. ベルンシュタイン、F. メーリング、M. アドラー、H. クノをあげ、かれらが「マルクス主義を新カント主義の実証主義的風土に調節した」のに対し、新ヘーゲル主義（単にマルクス主義者ばかりでない）として、つぎの人々を数えている。Paul Barth, *Die Geschichtsphilosophie Hegels und der Hegelianer*, 1890; Wilhelm Dilthey, *Die Jugendgeschichte Hegels*, 1902. ことにルカーチについては、その初期の論文 *Die Seele und die Formen*, 1911 が「ヘーゲル・ルネッサンス」

でヒルファードィングの『金融資本論』にしめされているように、マルクス主義と社会主義とを分離する考えであった。「マルクス主義を社会主義そのものと同一視することは、たとえ内外を問わず広くおこなわれているとはいえ、やはり誤った見解である。というのは、論理的に、つまり、ただ科学体系としてだけみれば、したがってその歴史的作用を離れてみれば、マルクス主義はただマルクス主義的歴史観を一般に公式化したところの、社会の運動法則の理論たるにすぎないのであって、マルクス主義経済学はこの歴史観を商品生産時代に適用するものである。社会主義的結論は、商品生産社会でおこなわれる諸傾向の結果である。けれども、マルクス主義の正しさに対する洞察は、けっして価値判断の所産でもなければ、実践的態度にたいする指示でもない。というのは、ある必然性を認識するということと、この必然性に仕えるということとは、違っているからである。』<sup>25)</sup>

理論と実践との関係について当時のマルクス主義者の考え方は、20世紀の初頭ではほぼ2つに分かれていた。わたしは以前に『思想』(第489号)のなかでこの点にふれ、社会民主党の主流の考え方は、ほぼ『ルードヴィヒ・フォイエルバッハと古典哲学の終結』でエンゲルスが定式化した唯物論が観念論かの区分にしたがって、観念論に対決して唯物論的側面を力説するか、あるいはせいぜい意識を越えた自然の世界のなかで運動法則をとらえる自然弁証法だけを問題としていた、ことを明らかにした。ことに、科学的方法を旗印とする修正主義者の方法意識には、エンゲルスの『反デューリング論』のなかのあまりにも有名な次のテーゼがあった。「事物と事物の知識との全体的連関のなかで、自己の占める位置を明らかにしようという要求が、あらゆる個別科学のなかにあられるやいなや、この全体的連関を取り扱う特殊な科学はすべて不用になる。

の萌芽であるという。David Koigen, *Ideen zur Philosophie der Kultur*, 1910; Johann Plenge, *Hegel und Marx*, 1911; Sven Helander, *Marx und Hegel*, 1920. ルカーチの『歴史と階級意識』とコルシュについては、いうまでもない。

- 25) Rudolf Hilferding, *Das Finanzkapital. Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus*, 1910. 林要訳『金融資本論』大月書店版、14-5ページ。なお、ルカーチとくらべると、ルカーチがペルンシュタインと対決したのに対し、コルシュはこのヒルファードィングとカウツキーであった。コルシュのカウツキー批判は、後論で展開するはずである。

これまで一切の科学のうちでなお独立に存続していくものは、思惟とその法則とにかんする学問——形式論理学と弁証法とである。すべてのものは、自然と歴史とに関する実証的科学のなかに解消してしまう。」<sup>26)</sup> こうしたエンゲルスの考え方に対決して、ルカーチは『歴史と階級意識』の「物象化とプロレタリアートの意識」のなかで、自然弁証法を否定した（もっとも、かれはのちにこの点を自己批判したのだ）<sup>27)</sup>。コルシュはルカーチとはちがってエンゲルスを真正面から批判せずに、この文章が哲学そのものの否定と受けとられている、とのみ指摘している。ここでむしろ、コルシュはルカーチのように、マルクスとエンゲルスとでは、弁証法の考え方にちがいがあると、言うべきであったであろう。

これに対して、主体的契機を重んずるコルシュは、マルクスの『フォイエルバッハ・テーゼ』を根拠とする。ルカーチもまたそうであった。ルカーチは「正統マルクス主義とはなにか」をば、これまたあまりにも有名な第11テーゼ「哲学者たちは世界をいろいろに解釈してきただけである。だが、いまや重要なことは、世界を変革することである」<sup>28)</sup>からはじめているし、第3テーゼ「人間は環境と教育の産物であり、したがって、人間の変革は他の環境と教育の変革の産物である」という唯物論は、環境こそ人間によって変革されねばならず、教育者自身が教育されねばならないことを忘れている」ことを、その基礎においた。コルシュはすでに22年の『唯物史観の立場』のなかで、「この若きマルクスの11のテーゼは『新しい世界観の天才的な萌芽』以上のものをしめしている」<sup>29)</sup>とのべ、『マルクス主義と哲学』のなかでも、「経済、政治、イデオロギー、のみならず社会的生成や意識的な社会的行為もまた『変革の実践』（フォイエルバッハ・テーゼ）の生き生きとした統一体 lebendige Einheit

26) Friedrich Engels, *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*, 1878. 邦訳「反デューリング論」『マル・エン選集』大月書店版、第14巻、上、98ページ。

27) Georg Lukács, *Geschichte und Klassenbewusstsein*, 1923, SS. 145-47. 小訳、104-08ページ。

28) Georg Lukács, *ibid.*, S. 13. 小訳『ローザとマルクス主義』15ページ。

29) Karl Korsch, *Der Standpunkt der materialistischen Geschichtsauffassung*, 1922, (*Marxismus und Philosophie*, S. 135.)

der “umwälzenden Praxis” に結びつく」と<sup>30)</sup>、言明している。まだ、『ドイツ・イデオロギー』や『経済学・哲学手稿』が発見されていない1920年代の初期に、主体的唯物論が「フォイエルバッハ・テーゼ」を根拠としたことはじゅうぶんに理解されるであろう。

われわれは、主体的唯物論と客観的唯物論との対立の萌芽を、この20年代の初期においてみることができるとともに、それぞれのマルクス主義理解が「初期マルクス」と「後期エンゲルス」を根拠としていることがあきらかになるであろう。しかも、こうしたマルクス主義観の相異が、現代の内外における唯物弁証法理解を二分しているといえるし、戦後の長い論争においても、これら2つの立場の間には大きい溝が埋られてはいないのである。いうまでもなく、この問題は単なるマルクス主義系譜学の問題ではないし、また折衷主義的に2つの契機を結び合わせることもできない。このばあい、われわれはまず、いずれかの立場に立たねばならず、それぞれの立場を固守するかぎり、これまでの限界を突きくずすことはできないであろう。わたしはここで、これ以上に提起された理論と実践の問題に立ちいるわけにはいかない。ただ、これらは無媒介に結びつくものではなく、両者の間に否定的な媒介関係をおかねばならない、つまり理論と実践とを単に硬直した二元性としてとらえることなく、相互に規定されながら動くものとみなければ、具体的な形でとらえることができないことを、しめしておこう。

われわれは、ここで再びコルシュの『マルクス主義と哲学』との関係という論点にかえろう。コルシュが意識的変革の問題を当時の社会民主党内部の哲学無視の態度に対して提起したのも、意識の問題を社会的発展の契機として入れてこなければ、哲学を無視するか、個別科学に解消せざるをえないからである。こうした態度は、正統派たるフランツ・メーリングの立場にもみられるとして、次のようにいう。「フランツ・メーリングは以前からずっと簡潔に、哲学問題に対するかれなりの正統マルクス主義の立場を特色づけて、「哲学とい

30) Karl Korsch, *Marxismus und Philosophie*, S. 77.

う脳髓の織物とすっかり決別することこそ、師マルクスとエンゲルスが不滅の業績を残した前提であった」と、述べている。この言葉は「マルクスとエンゲルスの哲学上の端緒に、だれよりも深い関心を払ってきた」という資格のあるメーリングのものだけに、すべての哲学問題に関する第2インターナショナル(1889—1914年)のマルクス主義理論家たちが、主にどういう立場に立っていたかを、端的に物語っている。」<sup>31)</sup>

意識が現実の存在を貫ぬき、歴史の変革にむかう弁証法をヘーゲル弁証法から取り出し、これをマルクス主義の中核にすえるコルシュは、あきらかに新カント派的な社会民主党の考え方とは対決して、ルカーチの弁証法と重なり合う。期せずして、23年という年におなじ立場の考え方が、一方はハンガリー革命の挫折を体験したルカーチと他方はドイツ革命の挫折を体験したコルシュにあらわれたことは、きわめて興味ぶかいし、また、24年におなじくコミンテルンから左翼主観主義として批判をうけたのも、けっして偶然ではない。だが、ルカーチとコルシュとはかならずしも同じ考え方をもっていたわけではない。思想家はつねに個性をもっているから、けっして同一の歴史の流れに解消してしまうことはできない。ルカーチにおいては、「歴史を作る弁証法」と「歴史を掴む弁証法」が重なり合っているのに、コルシュのばあい歴史変革の考え方はあっても歴史認識が論理化されない。というのも、コルシュにおいては、ルカーチの弁証法とちがって、主体と客体とが、意識と存在とが直接的に結合しているからである。すなわち、主体と客体とが固定しているのではなく、両者が分裂し、この分裂をとおして主体がいかに客観に迫るか、逆にいえば歴史的・社会的現実をプロレタリアートの階級意識がうけとめ、これを認識する過程が、みられないからである。もとより、コルシュは、経験的な具体的・現実的諸問題についての分析をおこなってはいる。だが、プロレタリアートによる社会変革と社会の総体認識という問題性を示しながら、これを一步一步理論的に掘り下げる過程がみられない。だから、主体と客体との間の矛盾や緊迫感がでてこ

31) Karl Korsch, *ibid.*, S. 51.

ないのである。

そうだとすれば、コルシュは果たして真の意味での弁証法をもっていた、といえるだろうか。認識の合理性を支えているものは、たしかに現実変革の情熱である。グラムシの『新君主論』の指摘をまつまでもなく、「情熱が知性をあらう。」が同時に、客観の合理的認識がなければ、それは単なるユートピアかイデオロギーにならざるをえない。実践と理論とは、存在と意識とは直接的に同一であるのではない。実践と理論との間には、相剋や矛盾の過程がでてくるのであり、初期のルカーチの弁証法を支えていたものは、このような合理性和非合理性との葛藤であったし、ここに思想体系を生みだす苦しみもあるのだ。

「歴史を掴む弁証法」がなければ、カウツキーの客観主義の裏返しの主観主義が生ずるし、合理主義の裏返し of 非合理主義が、科学主義の裏がえしの行動主義が生ずるであろう。これら2つの要素を2つに分って並べるだけならば、単なる悪しき相対主義を生むだけのことである。事実、20年にコルシュは行動主義的ルクセンブルギズムに走り、ルカーチは意識性の問題と組織論をかかげてレーニズムに入った。われわれはこれを単にその後の政治情勢の変化だけで理解するのではなくて、同じく主観主義との刻印をうけながらも、『歴史と階級意識』と『マルクス主義と哲学』との論理構成の差にも求めねばならないであろう<sup>32)</sup>。

(未完)

32) わたしは、つぎに ■ 総体性のカテゴリーと ■ プロレタリア独裁を予定している。